

《紀行》

プラタナスの木蔭で

— パリの大学・フランスの学芸 —

永 冶 日出雄

(一)

オタンと呼ばれるその都市は、ローマの皇帝アウグスチヌスにちなんで命名され、はやくもタキトゥスの『年代記』のなかに現れている。中世の暮しと信仰が純朴な文化を開花させたあと、そこはいつしか時流にとり残された。いまではブルゴーニュの中心ディジョンから日に二度のバスしか通じていない。悠長でよく揺れる乗りものではあるが、車窓から眺める涼秋の田園は素晴らしかった。割合に平坦で単調なフランスの国土のなかで、パリから二百キロほど東南にあるこの地方は、中央山塊の裾野をなし、バスもしだいに山道と丘陵に入る。頬にあたる微風はやや冷たいが、珍らしく紺碧の空が拡がり、ひなびた人家の点々とする村

落に、色づく樹の葉が美しい。

やがて眺望のきく高みにさしかかると、見渡すかぎりの緩やかな斜面に、黄金色に織りなすブドウ畑が展開していた。直立した矮樹に黒い房が実り、籠をかかえた農婦もみられる。これこそ『黄金の斜面』と名付けられ、ブルゴーニュ・ワインの産地として有名な地帯である。ただしここで造られる銘酒も、遠くに運搬すると、本来の味と香りが損なわれてしまう。

ディジョンでは思いのほかレストランが少なく、格式ばかり高くて愉快ではなかった。しかし、中世の施療院とチーズ市場を訪ねた田舎町ボーンでは、さすがに美食の国ブルゴーニュらしく、平凡なレストランでも芳醇なワインとともに、特産とされるエスカルゴや雄鶏を十分に堪能することができた。ちなみに私はエスカルゴを食べると蕁麻疹

を生ずる体質らしいが、それも新鮮で上質な場合には、発作が起らないこともブルゴーニュで発見したのである。

一年間の在外研究員として日本を離れ、パリで生活を開始してから、それははじめての旅行であった。海外渡航の手続や留学準備のための奔走や、さらには職場での整理や用意が、出発する半年もまえから私の毎日を余裕のないものにしていった。フランスにおける気候風土の相違や生活環境の変化が、疲労と倦怠を蓄積したことはいうまでもない。

しかし、心身を消耗したもつとも大きな原因は、ユネスコが主催するある国際会議に参加したことである。その会議の性格や進行が私の期待や準備とかなり相違したことはまだしも、ユネスコあるいは国際連合の活動にたいして日本で覚えたとおなじ疑問と違和感が消えないのである。欲張りすぎた当初の計画を反省し、本当に専念できる分野と課題に在外研究の目的を限定しようと思ひなおしていた。ルソーゆかりのアカデミーに寄るつもりもあるが、ブルゴーニュを旅するのも、これ以上に自分の状態を悪くしないためである。

正午に出発したバスがオタンに着く頃には、乗客も僅かとなり、秋の陽も西に傾いていた。終点でみつけた粗末なホテルに荷物を置き、市街図をもらう。古代ローマの劇場跡と中世に建てられたラン・ラザール大聖堂は、都市の北

端に位置している。市内バスもタクシーもない様子で、オタンを徒歩で縦断する。真中に市庁舎と広場があったが、そのあたりですら寂れた商店と疎らな人影に出逢うだけであつた。

ながい坂道を昇って、サン・ラザール大聖堂に到る。崩れかかる石扉や仰ぎみる尖塔にも夕闇が迫り、隣接する宗教美術館はすでに閉ざされていた。この教会はヴェズレイのサント・マドレーヌ寺院とともに、ロマヌスク様式の傑作とされ、入口正面の装飾彫刻と礼拝堂の柱頭石彫はとくに有名である。

案内書の説明写真のなかには、天使に抱えられた段通の浮彫があり、渦巻状の髪を画く鮮やかな描出が私を惹きつけた。しかし、うす暗い室内を何度もまわって、数十の列柱を調べたが、段通を刻んだ柱頭はどこにも存在しない。尼僧らしいふたりづれのほかは、訪れる観光客もなく、その人達に尋ねても不明である。ほとんど諦めながら、案内書をあらためて入念に読み、求めている作品が奥の別室に納められていることを知った。

祭壇の背後から屋根裏へ通ずるような、狭く急な階段を昇る。参事会室と呼ばれる小さな部屋に、柱頭だけがいくつか陳列してあつた。天使と段通の美事な彫刻もそこに含まれている。ほかの柱頭も名作ぞろいで、題材もまた多様

である。ロマネスク彫刻には民家の素朴な信仰が窺められているが、人と獣の交叉する怪奇な幻想も少なくない。

私の魂を魅了したのは幼いキリストと東方からの三人の博士を画いた浮彫であつた。「博士ら賤が家に入りて、幼な児その日マリヤとともに在すをみたり。ひれ伏して拝し、かつ小箱を開け、黄金・香料・没薬など禮物を献げたり」と『マタイ伝』に語られている。緊張した博士たちの顔は、律儀さと謙虚さを感じさせた。マリヤの表情も若い農婦の純朴さを湛えている。無邪気なキリストの手には、献上された素焼きの壺がある。それが私にははじめ酒壺のように映じた。地元の銘酒ブルゴーニュ・ワインとおなじく、この浮彫は凡愚の心をほのぼのと暖めてくれる。十二世紀に造られた石室と彫刻のなかで、私は時の過ぎるのも忘れた。

ロマネスク様式とゴシック様式の相違は、たいていの美術書で説明されている。しかし、宗教芸術の変遷に関する叙述は、あまりに専門的で局部的であることが多く、本質的な事柄を把握しにくい。教会の塔や内陣についての記述や図解に、ほとんど私は興味を感じないのである。むしろロマネスク芸術に自分の関心が向かいはじめたのは、ある旅行家から与えられた簡単な示唆による。

パリのノートル・ダム大聖堂やウィーンのザンクト・ステファン大寺院に代表されるゴシック様式は、中世後期か

らほとんどが大都市で建造され、強大な富と権力を基盤とする。それは宏壮な規模と整然たる構築を有し、荘重かつ威圧的に感じられる。中世前期のロマネスク様式は、はるかに粗野で狭小な地域で生みだされた。この種の作品は一般に単純素朴であり、ゴシック芸術とは対照的に、著しく多様で個性的といえよう。

ロマネスク様式への憧憬の根源には、蓄積しつつある倦怠と憂鬱があつた。それはたんに海外出張に伴う疲労や国際会議に対する幻滅によるものではない。またノートル・ダム大寺院とヴェルサイユ宮殿で、権勢と虚飾の空しさを感じたためばかりでもない。そうした倦怠と憂鬱は日本における私の生活と見聞のなかで次第に醸成されたものであつた。

蔽密に設計された、整然たる体系を至高のものとして疑わないこと——それを私はゴシック様式への崇拜と名づけよう。このような崇拜は政治経済から学問文化にいたるまで、さまざま分野に認められる。もとより高邁な理想に導かれる社会活動に参加したり、偉大な思想体系を撰取る情熱や努力に、私も敬意の念を借しむ者ではない。しかし、自己の崇める教義と規範だけを価値あるものと信じ、迷える小羊の試行錯誤や独り歩きを、軽蔑したり嘲笑することはなからうか。独善的な教条と傲慢な姿勢ほど民衆の

反感を掻きたてるものは稀であろう。こうした権威主義や事大主義が連帯し協力すべき人々の間に、数多くの不和不信を惹起することに、心を暗くしてきた近年なのである。

ゴシック様式には庶民の求める大切な要素が欠けている。そこではロマネスク芸術の魅力である素朴さと身近かさ、個性と多面性が消えうせる。中世後期やルネサンスに画かれた崇高な聖者や端正な聖女は、なぜあのようにとり澄まし、おなじ顔付をしているのであろうか。こうした人々が私たち凡夫鈍才をどんな眼で眺めるかと想像するや、慄然とした気持に襲われる。冷えた身体をブドウ酒で暖め合うような優しさが、そこには感じられないのである。

私にとつてヨーロッパは、ゴシック様式の連峰がそびえる、高遠な世界であつた。そうした山嶺とはプラトンやデカルトやヘーゲルであり、さらにはシュタイーナ礼拝堂やコメディ・フランセーズやウィーン・フィルハーモニーにほかならない。しかし、オタンへの旅は蓄積した疲労や倦怠を癒やすとともに、より卑近で質実なものを尋ね行く端緒となつた。これからの一年にいわばヨーロッパの裾野をめぐり、生活の多様さや文化の根深さを追い求めようと私は考えた。

カルチェ・ラタンの町角で、焼き栗とトウモロコシを買い、散り重なる浅黄色の落葉と、枯枝の増す大樹の梢が、深まり行く秋を感じさせた。十一月の初旬である。夏季の長いバカンスがようやく終わり、パリ大学でも新学期に入った。閑散としていたソルボンヌのリシュリュール大廊下やデカルト講堂も、フランスの青年男女や各国からの留学生で一杯になる。

サント・ジュヌヴィエーヴの丘でアペラールが講義を開始したことは、パリ大学の起源としてよく語られる。この年にアペラールを記念した切手が発行されたので、彼がちょうど九百年前に生まれた、とはじめて私は気がつく。

そこには『往復書簡』で知られる恋人のエロイズも美しく描かれていた。宏壮なソルボンヌの堂宇も、十三世紀に創設された学寮に源をもつ。そうした時代から五月革命を経た今日まで、この一帯がヨーロッパの学術における、中心の一つをなしたことはない。しかし、アンシャン・レジームのもとではソルボンヌが、自由な思想と批判的精神を弾圧する、反動の牙城であつた。デカルトもパスカルもここでは毛嫌いされ、ルソーもデイドロもここで糾弾された。

フランスの大学はすべて国立であり、首都にはパリ大学しかない。一九六八年の五月革命のあと、パリ大学は十三に分割再編され、各々がほぼ独立した組織となった。それらの施設は首都および近郊のいろいろな場所に散在し、各大学の性格や機構も私たちには複雑奇異に感じられる。たとえば、ソルボンヌの校舎を共有するパリ第一（バンテオン II ソルボンヌ）とパリ第四（ソルボンヌ）は、哲学・

史学・文学などの学科編成をもち、伝統的なアカデミズムの雰囲気濃厚である。これらとは対照的に首都の近郊に置かれたパリ第八（ヴァンセンヌ）、パリ第十（ナンテール）、第十二（ヴァレ・ド・マルヌ）は開学からの歴史も浅く、強烈な個性を有した新構想大学といわれる。なお、政府が意図した建学の構想とは異なる方向に発展を遂げ、また左翼的な教官・学生が多いとして、外部からの攻撃に晒されていた第八大学は、数年前から大学紛争の渦中に入ったが、ついに一九八〇年の七月にヴァンセンヌの校舎が取り壊しとなり、遠くサン・ドニへの移転が強行された。

高等教育の機関としては、パリ大学のほかにエコール・ノルマル・シュペリエール、コレージュ・ド・フランス、さらにいくつかの高等研究院が存在する。私はソルボンヌにあるパリ第一、パリ第四、およびコレージュ・ド・フランスで、研究テーマに関連する若干の授業を聴くことにき

めた。パリ大学でも単位や学位を得るため、正規に登録する手続はかなり面倒であるが、講義や実習に参加するだけでよければ、担当教官の諒承だけで足りる。この慣習は留学の期間も短く、不確定な要素の多い外国人にとって、非常に都合がよい。

今回の私の滞在は、文部省の在外研究員としてである。

こうした資格に伴う手続と制約はかなり厳しいが、大学への登録や授業への参加は、義務としては課せられていない。それゆえ、専門的な研究を推進することだけを考えれば、図書館や研究所で資料の蒐集と検討に専念するほうが、能率的であるとも考えられる。しかし、私の抱いた目的のなかには、大学や授業の実情を知り、学生と研究者の実態をこの眼で確かめることが含まれていた。そしてまた、過ぎ去った青春をいまいちど呼び戻すかのように、若い人達の間身に置く生活に、新鮮な喜びを感じるのであった。

フランスにおける高等教育の組織や状況は、実際に見聞しないと納得できない事柄が多い。私が参加した講義や演習では、正規の学生は半分に満たず、その他は外国からの留学生や一般の社会人であった。学校や研究所に勤務する人達もあり、社会や家庭で自分の仕事をもつ人達も見出される。コレージュ・ド・フランスの聴講者としては中年や老年の婦人が多く、これはパリにおける音楽会や演劇につ

いても同様である。日本では学園や学生が高い壁によって世間から遮断され、また卒業した晩には、大学とか学問はもう結構という社会人がほとんどであろう。フランスでは大半の学生がなんらかの職場で働いているし、大学の授業や文化的な行事にも、成人の参加がきわめて活発である。

こうした人達への配慮のためもあるが、ソルボンヌでも午後の四時あるいは五時から始まる講義や演習が多い。夕食は八時頃からであり、たいいていの演奏会や演劇は九時から開始である。夏季には十時すぎまで戸外が明るく、帰宅するのがいつも夜半となる。朝早く起床できないのは当然である。

ソルボンヌで学んだ一年の間には、いろいろな出来事があった。冬には正門に面する大通りで、文学者のロラン・バルトが交通事故にあい、まもなく世を去った。コレージュ・ド・フランスの教授であるバルトは、哲学者のミッシェル・フーコーとともに、とも人気が高く、前者の講義では一時間前に講堂に着かないと、座席が確保できない盛況だった。

四月には外国人留学生と外国人労働者の締め出しに反対して、フランスの各地で大学紛争が再燃した。管理が厳しく、おっとりした学生の多いソルボンヌでも、全学ストライキが敢行され、校舎の主要な入口がほとんど閉鎖された。

折悪しくそうした日にポワチエ大学のジャック・ドント教授の特別講演が予定され、聴講者は少なかったが、デカルト講堂で『資本論』における弁証法について講じられた。

はじめてフランスを訪れたときから、ドント氏はいつも暖かな配慮を示してくださる。外国語で便りを書くのは気が重く、怠たり勝ちになるが、いつも旅先からの絵葉書や研究論文の抜刷を頂く。このときもソルボンヌの脇にあるギリシア料理アクロポリスに連れていかれた。カルチェ・ラタンは昔とほとんど変わらないというドント氏は、料理屋の主人とも親しそうに握手する。私と食事を共にすることを予想して、春に出版された御自身の著作『知られざるヘーゲル』を持参してこられた。ここに展開されたヘーゲルへの考察は、きわめて卓抜と評価も高いが、日本語版の装丁は、著者みずからが驚くほど立派である。ポワチエ大学でも紛争が激化し、学長が軟禁されたという。ドント氏はその大学に置かれたヘーゲルⅡマルクス研究所の創設者であるが、御尊父はポワチエの革新市長を勤められた、とのちに友人が話してくれた。

サルトルの計報に接したのも、ソルボンヌ広場に臨む小さなカフェである。ボーヴ・ワールについて修士論文を書きはじめた韓国の女子学生が一緒のときであった。ちょうど近くの映画館でサルトルとボーヴ・ワールの伝記が上映

され、またサルトルの戯曲もしばしばパリの小さな劇場で上演されている。それまではむしろバシュテールやフーコーの書物がよく読まれていたと感したが、まもなく多くの書店にサルトルの写真が掲げられ、その作品が派手に並べられた。

ソルボンヌ広場のカフェには授業や学会などの帰りによく立ち寄る。その場所ではかつて大衆食堂フリコトールが客を呼んだという。田舎から出てきたリュシアンが文学者ダルトスと知り合う店である。この堅忍不拔の作家は、生きるためのみに食事を取り、いつも水だけを飲んだと描かれている。サルトルの思想には傾倒するまでに至らなかつたが、私にはバルザックの『幻滅』を貪るように読む時期があつた。

(三)

聞き慣れないその劇場は、パスチエの付近と教えられていた。革命記念円柱のそばえる広場でバスを降り、地図を辿りつつ歩くと、思いのほか遠い。開演の時刻も迫り、夕闇にみぞれ混りの雨が激しくなる。劇場の入口は立てこんだ商店街にあり、切符を世話してくれた比留川彰氏が辛棒ぶよく待っていた。

「オペリスク座でラシーヌの『エステル』が五回だけ上演される。この悲劇は滅多に観られないから」と彼に勧められた。素姓を隠してベルシアの王妃となつた美貌のユダヤ女性が、イスラエルの民を絶滅の危機から救う物語である。一六八九年にサン・シュールの学館で初演されたときとおなじく、今回の『エステル』も若い女性だけで演じられる。古代オリエントに擬した衣裳と舞台装置は典雅端正であり、荘重な音楽隊と合唱団を伴うことは、歌舞伎の古典を連想させる。オペリスク座の地味な建築や色褪せた装飾も、こうした作品には適するであろう。場末の劇場で経験したこの古めかしい公演が、演劇への関心を私のうちに覚醒することとなった。

パリに滞在して、芝居を楽しみたいと思う日本人は、まざコマデイ・フランセーズに赴き、モリエールの戯曲を観る。舞台は変化に乏しく、会話はほとんど聴き取れない。むかしフランス文学の泰斗である辰野隆が、ここで意気銷沈した逸話は有名である。私も渡欧してまもなく、コマデイ・フランセーズで『ドン・ジュアン』に接し、観劇する意志をほとんど喪失した。劇場へ足繁く通うのは、ソルボンヌにおける十八世紀文学の演習で、若い比留川氏と知り合ってからである。

パリの劇場と芝居小屋は百を超え、ギリシアの古典劇か

らいヨネスコなどの最新作まで無数の作品が上演されている。壮麗な劇場にふさわしい戯曲もあり、質素な小屋で演ずべき脚本もある。そして、同じ種類の作品を扱っても、国立劇場や大劇場が、中小の芝居小屋に優るとは限らない。むしろ経済的な基盤の弱い劇団や劇場は、特別な工夫と魅力によって観客を呼ぶのである。それらはマス・コミ化されぬ良さをもち、演劇の本来の姿を彷彿させる。

大学で会う毎に、比留川氏とは情報を交換した。彼も最初の一年は、あらかじめ脚本を読んでから、観劇に赴いたという。若い留学生の生活は、物価上昇と円安傾向でますます厳しいが、演劇や演奏会に行くため、昼食を抜いたり、遠方の安い食堂へ通う様子には心を動かされる。パリでは無為徒食の日本人が目立つときくが、自立心に富み、感受性の豊かな青年に出逢うことは、旅する者の喜びであろう。デイドロの『ラモールの甥』はひとりで観にいった。カルトゥシュリという風変わりな名の劇場は、ヴァンセンヌの森の奥深くにある。そこへはパリの東南端で地下鉄を郊外バスに乗り換える。芽生えつつある若葉を眺めながら小道を歩くと、荒れた馬場と粗末なバラックがみえてきた。カルトゥシュリとは弾薬砲製造所の意味で、ここに残された数個の家屋は、かつて陸軍が使用したものであろう。それは中学生のとき、私たちが学んだ兵舎の跡によく似

ている。発足もない新制中学は、軍隊の使用した施設を借りるほかに、雨漏りのする土間で私たちは二部授業をうけた。その木造りのバラックは小高い丘にあり、周囲にはやはり樹林と空地しかなかった。

カルトゥシュリ劇場は四棟のバラックから成り、各々が独立した芝居小屋となっている。『ラモールの甥』は木剣座という建物で演じられ、その他の建物ではシェイクスピアの『冬物語』、ワイルドの『幸福な王子』、さらにチリの社会問題を訴えた新作が公演されていた。

舞台もまた奇抜である。三十畳ほどの変哲もない部屋で、中央には小さな机とふたつの椅子が置いてあった。それらを囲むように、沢山の長い机とベンチが無造作に並べられ、片隅には玉突き用の台が備えてある。日曜のマチネーであるが、五十人ほどの観客でベンチは一杯になった。大きな劇場では年輩の客が大半を占めるが、こうした芝居小屋は演劇好きの若い男女が多い。日本人に出逢うことは稀である。どんな人達が演じ、どんな人達が観ているかを知るだけでも、未知の劇場に一度は赴く価値がある、と私は考えはじめていた。

「晴れた日であろうと、いやな天気であろうと……。」
かく吹きながら、デイドロに扮した役者が現われ、真中の椅子に腰をおろす。やがてラモールの甥に話しかけ、会話は

歌や玉突きを交えつつ發展する。登場人物はこのふたりとラモーに仕える少年ひとりにすぎない。

デイドロが好んだバレ・ロワイヤルのカフェは、こうした部屋と客席に似通うものであつたろう。座っている観客みずからが、茶屋か居酒屋にいるような錯覚にとらわれる。机のうえにランプが置かれているのもよい。ここで本当にビールかワインが飲めれば、もつと素晴らしい。バレ・ロワイヤルの広場は、いまでも美しい回廊と噴水で人々を惹きつける。国立図書館の帰りには、私もその広場でしばらく息を抜くことが多い。とはいへ、周囲には高級な宝石店や骨董屋やレストランが多く、庶民的とはい難いのである。

啓蒙思想に属するものとしては、この年はヴォルテールの作品がしばしば上演された。ジャン・ルイ・パローの劇団による『ザディグ』は、華麗な衣裳と舞台効果でトルコ情緒を満喫させ、『カンデイド』と『バピロンの王女』も小さな劇場で観客を集めていた。ヴォルテールみずからが戯曲として書いた作品は顧みられず、すべて小説から脚色されたのは皮肉に感じられる。

『ラモーの甥』が芝居になるとは予想しなかったが、舞台での台詞は原文のままらしい。この傑作はまずゲーテの独訳によって流布し、デイドロが世を去って百年ものちに

原典が発見された。演劇畑の人達が関心を向けたのは最近であり、一九六三年にはじめて舞台にかけられたとき。今回の公演は週に五回ずつ、四月中旬から三ヶ月の長きにわたる。

カルトウシュエリのような劇場では、プログラムといつても、配役を記した一枚の紙しかない。しかし、そこにはラモーの甥を真中に、舞台の写真が刷られていた。かつてデイドロの著作と一緒に読んだ友人がある。パリの国立図書館に通ったこともあるその人は、ふたたび留学することはもちろん、研究の時間を確保することさえ困難な昨今という。私は久しぶりに便りを書き、一枚のプログラムを同封して送った。

(四)

「拝復。ふたたびフランスへお越しくださるあなたを、パリでお迎えできないことが残念でございます。まずは私たちの美しい都会に、ながく滞在される御幸運をお祝いし、十八世紀に関する御研究が、恙なく運びますようお祈り致します。

はじめにひとつの挿話、つまり日本からの一通の手紙が、ヨーロッパでさまよった遍歴について語るのを

お許し下さい。これをおきき頂けば、あなたへの御返事が遅れた理由も、さらには私の現在の『身分』も判りにならうかと考えます。一月まえに日本を出発した丁重な御手紙が、ながい旅を続けたあと、私の手元に届いたのは昨日でございます。宛名としてパリ国立学術研究所気付、マローラ様と書かれたその手紙（私の名前もすこし綴りが誤っております）は、ソルボンヌの十八世紀文学研究室に回され、パリに住む私の両親のもとに転送され、最後にドイツにある私の住まいに着いたのです。

この地で私は夫と暮しております。一九七八年のルソー・ヴォルテール没後二百年記念の国際研究集会にはあなたも日本から参加され、会場とされた国立学術研究所で私も事務局の仕事を担当しました。この記念行事の三日後に、私はひとりの砲兵大尉と婚約し、今年の一月に結婚したのでございます。夫にはドイツ連邦共和国での勤務が命じられ、しばらく私もこちらで住むことになりました。

あの国際研究集会から一年ものちに、あなたから心の籠った御手紙を頂きました。なんと大きな喜びでしょう。私のことをよく記憶しておられ、いまでも感謝の念を抱いておられることに感動いたしました。一九七

八年の記念行事とパリ御滞在を有意義に感じておられ、本当に嬉しく思います。啓蒙運動の素晴らしさは『知識人を結合した』ことにあるといわれますが、今日においてはお私たちをこのように結びつけ、輝かしい未来のために協力させるのでございましょう。」

黒い髪と碧い瞳をもつ美しい女性から、最初の手紙が届いたのは十月の下旬である。差出人の欄にはマリー||テレーゼ・マローラ（いまはエルベ・スレー夫人となりました）と記されていた。異国的なアラビアの文字や日本の漢字をみるのが好きという彼女は、細かく整然たる字体で魅力的な文章を書く。パリ第四の大学院生であったマリー・テレーズさんは、ルソー・ヴォルテール記念集会の接待係を勤め、エルムノンヴィルへの追想旅行でも案内役を果たした。その小旅行の日に特別参加していた青年がスレー氏と思われる。私は御二人の結婚を祝し、一九七八年が私たちにとってますます記念すべき年になったと返事を書いた。

半月ほどするとふたたび便りがくる。パリ第四のポモージェの演習にも私は顔を出していたが、マリー・テレーズさんも昨年までこの演習を聴講したという。彼女の修士論文の題目は、『マリポーの演劇における婦人の地位』であった。十八世紀の文学者のなかでもマリポーの女性観は傑出し、彼の作品に登場する婦人は、男性と対等か上位にあ

るとき。

秋から冬にかけて私の研究計画もすこしずつ進んでいった。大学では学問の方法や現状について学ぶことができたし、啓蒙思想に関する文献はパリの図書館だけでも無尽蔵に感じられた。当面の主要な課題は、エルヴェシウスの伝記的資料を蒐集し、いままも保存されている領地ヴォレを訪ねることにほかならない。この唯物論者の子孫であり、『ヴォレの領主エルヴェシウス』の著者でもあるペアトリス・ダンドローさんにも会うことができた。ダンドローさんとその御一家は平素はパリで暮しておられる。しかし、クリスマスや復活祭はヴォレで過ごすとのことで、その機会にノルマンディにある領地と城館を訪ねる手筈になった。^(註)スレー御夫妻も休暇にはパリに帰る。ぜひいちどお会いしたいと書かれていたが、その約束はやがて素晴らしい形で実現する。年の暮も迫った頃の書簡である。

「御手紙を拝見すると、冬の休暇には奥様もまたパリに來られるとのこと、大変に嬉しく思います。御二人を私の夫エルベの両親の家にお招きできれば、大きな喜びでございます。

一月二日の晩餐において下されば、私たちの両親と従兄夫妻を紹介できると存じます。みな御二人と知り合うことを待ち望み、一緒に素適な夕べを過ごすこと

を楽しみにしております。

御手紙に示された私への質問にお答えしましょう。女性の状況という問題に私が強い関心を抱いていることは事実ですが、たんに『解放』や『権利』だけを考えているわけではありません。この問題はなによりも個人の自覚という問題であると信じます。みずから自己を主張し、自己を意識できる存在であると、女性自身が肯定することこそ、本当に大切と思われます。

エルヴェシウスについて私はなにも知りませんので、お話を伺うことを楽しみにしております。優れた人物の子孫に関心をおもちのようなので、驚かれるようなことを申しませう。あのエッフェル塔や沢山の建築をなしとげた技術者ギヌスターヴ・エッフェルの孫は、私の夫エルベ・スレーでございます。偉大な人間にまつわる、か弱い子孫の小話とお考えください。」

その一月二日の朝に、はじめて家内とエッフェル塔に昇った。塔の上は強風で非常に寒いが、冬のパリでこれほど晴れた日は稀であろう。高みから眺めると、セーヌ河やコンコルド広場の全体がよく判る。遙かにバンテオンやサン・シュルプス寺院も浮んでいた。私はまだ東京タワーにも昇ったことはない。京都にも名古屋にも同じ形の塔があるときけば、エッフェルの子孫も驚くにちがいない。

マリー・テレーズさんの手紙には、御尊父であるフェロ
ー氏の住所が、詳しく説明されていた。偶然にもそれは私
たちのホテルから百米と離れていない位置にある。リュク
サンブール公園の西側にあたり、リアンス・フランセー
ズに近い。典雅な公園の付近でも、オデオンやソルボンヌ
に向かう街並はやや騒々しく感じられ、以前から私はこの
静かな住宅街を好んでいた。久しぶりに会うマリー・テレ
ーズさんは、清楚で機敏な乙女という国際集会の印象を和
らげ、はるかに寛いで陽気である。スレー氏は士官学校を
卒業したエリートにふさわしく、日本の地理を実によく知
っておられる。同じように招かれた従兄の御夫妻は、ボル
ド産の銘酒をお土産に携えてきて、家内にラベルの読み方
を丁寧に教えてくださった。この人達は自分の船をもって
いて、次の夏に大西洋沿岸から地中海へと航海する予定を
話された。

フランスの一家とこれほど親密に交際した経験は私には
数少ない。ソルボンヌの学生たちは大学とは別のところに
活動舞台や交友関係をもつらしく、自分の授業が終わると
すぐに帰ってしまう。他人から紹介されてお相手したり、
漠然とした目的で関係を求めるのを嫌うようで、これがや
はりフランスの個人主義であろうか。教授たちとの接触を
除けば、むしろ各国からの留学者と一緒にすることが多か

った。晚餐のお礼を兼ねて、こうした感想を、マリー・テ
レーズさんへの便りに書くと、まもなく返書が届いた。

「私の友人も結婚や就職でほとんど大学を去ってい
ます。大学当局に相談すれば、学生の生活や意識につ
いて情報がえられるかもしれませんが。しかし、最大の
秘訣は、あなた自身が怖れずに、友人をつくらうとな
さることです。演習でも図書館でも、大学食堂でもカ
フェでもそれは同様です。はじめて顔をみるような学
生や、二度と会う機会もない青年とすら、勇気をもつ
て議論なさったらいかがでしょう。自分の考えを相手
に伝え、質問しながら反応をひきだすという姿勢こそ
なによりも大切と存じます。」

スレー御夫妻の住むドイツの町は、地図にも記されてい
ないほど小さくて退屈であるという。しかし、春になると
オランダに赴いたり、東欧に出張して、大変に多忙の様子
である。その代りにパリにいるフェロー氏が、もういちど
私を招待してくださった。応接間にも中国の知人から贈ら
れた青磁の壺やアフリカ旅行のお土産らしい壁掛が飾られ
ていたが、はじめて通された書齋には下ガとドミエの原
画が掛けてある。フェロー氏はいま歴史秘話を執筆してい
るといわれた。昼食の準備ができ、きわめて魅力的なお婆
さんに紹介された。「お正月に来られたことは孫のスレー

夫妻からききました。娘のときからなによりも音楽が好きで、近頃は絵もはじめています。この建物の一階にもう五十年も住んでいて、近くの商店やホテルの主人もよく存じております。」こんなふうに柔和な口調と眼差で話された。

午後からはブローローニユの森にあるバガテル庭園へフェロー夫妻に案内して頂いた。それは広大な森の、もつとも奥深くにあり、平素はバスも通っていない。期待したバラ園は時期が早過ぎたが、リアやアカシアが美しく咲いていた。真中に中国風の四阿があり、あれはお国のものかと問われたので、私は首を振った。オデオン座で能の上演を観たというフェロー夫人にも、日本と中国の区別は難しい様子である。

帰り途はブローローニユの競馬場を抜け、エッフェル塔の近くを走る。フェロー氏はトロカデロ広場でいったん駐車し、すこし散歩したらと誘われた。日も長く、大気もさわやかとなり、休息を楽しむ老人や遊戯に興ずる子どもが多い。広場を横切って、シャイヨー宮わきの高台に立つと、壮麗な庭園が一望のもとにあった。それはセーヌの流れを越え、遙かに士官学校の建物にまで拡っている。エッフェル塔はこの位置から眺めるのがもつとも美事である、とここでフェロー氏に教えられた。

(註) エルヴェシウスへの地理的な、そして精神的な旅について、私はつぎの論稿でかなり詳しく述べた。

拙稿 エルヴェシウス―知られざる哲学者への旅路

(松島鈞ほか、現代に生きる教育思想、第三巻フランス、ぎょうせい、一九八一年刊、所収)

(五)

パリ大学における授業の形態は、私の経験したかぎりでも、多種多様であり、日本でなされる講義や演習とは、驚くほど異なったものも存在する。ここではオリヴィエ・ルネ・ブロック教授が担当された、『唯物論史研究』の演習について、やや詳しく紹介してみよう。第一大学に属する哲学研究・教育単位(UR)は、ブロック氏をはじめ十名の教授・助教授、および二十二名の講師を擁している。フランス十八世紀学会の会長であり、はじめて渡仏したときお世話になったイヴォン・ブラヴァル氏もここで教壇に立たれたが、残念にも半年前に定年退官された。『唯物論史研究』は大学院博士課程の授業にあたり、この演習を主宰されるブロック氏は、学部では古代哲学を担当しておられる。しかし、私の記憶にこの人の名が刻まれたのは、一九七七年に雑誌『パンセ』が掲載したマルクス研究によ

つてである。その論文は若きマルクスの著作『聖家族』に含まれる、フランス唯物論の素描と位置づけが、実は十九世紀の哲學家ルヌヴィユの『近代哲学提案』に依拠している、と論証したものであった。『聖家族』がフランス唯物論を理解するための基本文献とされてきただけに、こうした説明は衝撃的であり、またこれらふたつの著作にみられる類似と相違を検討することによって、マルクスの獨創性を浮彫にする試みは斬新で魅力に富む。私が参加した演習では、ブロック氏はランゲの『唯物論史』についての講述を続けられたが、書物自体の分析よりも、ランゲをめぐる社会状況や人間関係の考察が多くを占めていた。

『唯物論史』の演習は、隔週土曜に二時間ずつ続けられ、年間で十五回ほどに及ぶ。しかし、ブロック教授によってランゲの検討がすすめられるのは、そのうち三回にすぎない。他の回には受講者が順次に自己の研究課題と研究成果を発表し、各々について全員で質疑応答を行なう。たとえば、一九八〇年はじめにおける各回の論題と発表者は左記のごとくである。・一月五日 デイドロの哲学における変異の法則（アニー・イブライム） ・一月十九日 ランゲの『唯物論史』の批判的検討 第二回（ブロック） ・二月二日 十八世紀における自由思想と唯物論——哲學者サド（ミッシェル・ドロン） ・二月二十九日 ゲオルグ

・ビュッヒナー——唯物論の詩人（アンティモ・ネグリ）
・三月一日 唯物論史におけるスタンダールの『新しい哲学』（ジャン・シャルル・ジャンドル） ・三月十五日 安藤昌益——十八世紀の日本における「忘れえぬ」思想家（石川光一）

この授業の受講者は普通は二十名ほどを教え、パリ大学の院生はその三分の一ぐらいであるうか。その他はリセや研究所に在職している人が多く、時間帯もそうした事情を考慮して定められている。とくにブロック氏の演習には第一線の研究者が参加することもしばしばで、パリ第一で近代哲学を担当するデュブラン教授もつねに出席され、また唯物論者メリエの権威として知られる、ランス大学のロラン・デスネ教授もときどき聴講に来られた。

石川光一氏は南仏のモンペリエ第三大学で修士論文を準備しておられた。パリへは国鉄で八時間も要するが、月一度は『唯物論史研究』に参加される。地方大学の教授は指導する学生にこうした授業の聴講をすすめ、必要な交通費は政府から支給されるときく。以前にドント氏の御宅を訪ねたとき、私は石川氏の写真を見せてもらい、石川氏もまたドント氏から私の名前を教えられた。ふたりが接近したのは、このようにフランスの哲學者を仲介としてである。メリエを研究している石川氏はブロック教授からなぜ日本

の哲学をしないのかと質問され、日本の唯物論者について演習で報告することを約束したという。

安藤昌益についての報告を始める直前に、石川氏は私の席に来て、「この一ヶ月は本当に大変でした。引受けたことを実は後悔しました。」と囁いた。『自然真営道』などを急いで日本から取り寄せ、ノーマンの原文を探すのに苦労したらしい。しかし、その報告は明快で美事であり、フランスの研究者も「忘れられた思想家」に興味を感じたようである。一時間ほどの口頭発表であるが、日本人の場合には、あらかじめすべてを仏文の原稿で用意しないと、とても続けられない。精悍で勉強家の石川氏すら非常に消耗した様子である。報告の日には友達である日本人がもうひとり聴講にきて、録音の用意をしたが、終わってから調べると器械が故障していたらしく、ひと言も入っていなかった。

パリ第一の哲学研究・教育単位も、主要な研究室と講義室はソルボンヌに置かれている。しかし、なぜかそこから一キロほど離れたサン・ジェルマン・デ・プレ聖堂の近くでも、小さな建物で授業が行なわれる。市井の真中にある質素な造りで、関係者でなければ、これがパリ大学の校舎とは考えない。私の知る何人かの哲学教授は、重厚で威圧的なソルボンヌの堂宇よりも、この建物を好むらしく、規

模の小さな演習にはよく利用された。地下鉄へ降りる入口が脇にあり、向う側では洋品店が、隣りでは家具店が客を呼んでいる。この付近は反動的なソルボンヌに対抗して、かつて啓蒙思想家が出没した場所でもあった。かれらの立ち寄ったカフェや住居がいまも名残りをとどめ、デカルトの墓碑の置かれた教会から鐘の音が響く。そうした環境のなかで、デイドロの自然観の特色や、エルヴェシウスがスタンダールに与えた影響について、報告や討議を聴くのであった。

このように『唯物論史研究』の演習は平素でも学会あるいは研究会の性格を兼ねており、他大学の教授を招請して特別講義の企画されることもある。二月にはイタリアのペルーシア大学からネグリ教授が、四月にはボワチエ大学からドント教授が招かれ、こうした場合にはソルボンヌのデカルト講堂で、より広い聴衆を対象として講演が行なわれる。

さらに学年の終わりが近づくと、現在は受講していない卒業生や、国内および国外の研究者にも案内状が発せられ、盛大な研究集会が有終の美を飾る。この年の六月六、七日には、ブロック教授を中心とする研究グループの主催により、『十八世紀の唯物論と地下文書』と題するシンポジウムが催された。ソルボンヌにおけるこの行事には、フラン

ス文学史学会や国立学術研究所なども協賛し、啓蒙思想の分野では、一九八〇年のもっとも大きな研究集会となった。

アンシャン・レジームにおける思想統制と言論弾圧のもとで、次々と現れる非合法文献や匿名・偽名の著作は、近年とくに研究者の注目を惹いている。そうした文書が啓蒙思想の社会的な根深かさを示し、王権と教権に対する虚々実々の闘いを表わすからであろう。六月のシンポジウムでは、メリエ、ラ・メトリ、ヴォルテールらにまつわる地下文書が検討され、そのほか埋れた思想家や知られざる著作が数多く考察された。報告者と参加者のなかには、ロンドン大学のジョン・スバンク、リヨン大学のピエール・ルタ、国立学術研究所のジャン・ヴァルロー、セヴィリア大学のミグエル・ベントス、パリ第四のポモーなど著名な人々も含まれ、また東独とポーランドの研究者からは、自国の非合法文献について発表がなされた。

地下文書の歴史的意義や成立の事情を解明することは、定評ある古典や一流の思想家を研究するよりも、はるかに地味で困難な仕事である。エルヴェシウスに関しても、いくつかの著作は彼の名を騙る偽作と断定されている。私もまたヨーロッパの図書館で、エルヴェシウスの不思議な偽書を発見した。こうした作品の意図や刊行の事情について、これまでほとんど無関心でいたが、地下文書の検討からも

重要な結論を導きうることを、この研究集会は私に教えたのである。

(六)

カルチュエ・ラタンに密集する映画館を数えてみると、九十ほどに達した。ソルボンヌから歩いて、みなさして遠くない。日本でも話題になる『クレマー・クレマー』や『アメリカの伯父さん』もそこで知ったし、難解なハンガリー映画に閉口し、途中で退場したこともある。『テス』が人氣を高めたのは小雪の舞う頃であり、かくも古風で哀切な物語を味わうために、さまざまな色の髪と肌をもつ青年たちが、いつも長蛇の列をなしていることに感動するのであった。

盛り場のサン・ミッシェルで『赤いセーター』を観たのは、封切の翌日であった。なんの予備知識もなく、入口の写真で社会問題をテーマとしていただけ判る。それは特異な緊迫感に包まれた作品で、物語が展開するにつれて、『真昼の暗黒』に似たものと察した。フランスの東南部で、ランブラ家の幼い少女が誘拐され、林のなかで遺体が発見される。やがて容疑者として二十二才の会社員ラコシが逮捕された。画面は捜査の実態や、官憲における誘導や拷問

を執拗に追跡する。誘拐するときに着ていたとされる、赤いセーターが探し出され、有力な証拠となるが、容疑者には大きすぎて、だぶだぶである。少女を連れ去った自動車の色についても、隣人の証言は確かでない。法廷に引き立てられたラコシは、自己の無実を必死に訴えた。しかし、世人は犯罪への怒りと犠牲者への同情によって、母ひとり子ひとりのラコシ一家を憎悪迫害し、人殺しには極刑を、と司法当局に要求する。弁護人の努力と母親の励ましにもかわからず、ついに法廷は被告を有罪と認め、死刑の判決を下した。旗とプラカードをたて、裁判所まえの広場に集まった群衆は、判決の結果にどよめき歓呼する。まもなくギロチンにより処刑されるラコシ。その最期の姿が、何日も私の脳裡から離れないで困惑した。

映画『赤いセーター』はフランスで起こった実際の事件に基づいている。一九七四年にエックス・アン・プロヴァンス市で少女ドロレス・ランブラが誘拐殺害され、一九七六年に犯人としてクリスチアン・ラコシがマルセイユで死刑を執行された。しかし、このラコシ事件にはさまざまな疑義が抱かれ、まずジル・ペローが小説に採りあげ、さらにミッシェル・ドラックが映画化したのである。ここで提起されているのは、誤った捜査と裁判の可能性であり、そして司法のありかた、とくに死刑制度の是非である。そ

れはフランスの革命議会でも賛否両論があり、ドルフェイス事件で国論を二分した問題にほかならない。

封切された『赤いセーター』は、まもなく騒然たる物議と抵抗を惹起し、フランス社会の保守的で陰湿な側面を実感させることとなった。裁判批判と死刑廃止論が、激しい反感や反対に出逢うことは、この映画に描かれた群衆の動きによっても察せられるが、そうした保守的な底流は過去のものでも、虚構でもないのである。『赤いセーター』は法廷への信頼と犠牲者への同情を蹂躪する、との声が高くなった。新聞報道によれば、フランスのいくつかの都市や地方では、多くの個所が削除され、さらには上演禁止の処置が下された。芸術都市エックス・アン・プロヴァンスをはじめ、フランスの東南部では、『赤いセーター』に対する攻撃がもっとも熾烈であり、そうした動きには農業団体や在郷軍人会が関与している様子である。しかし、ラコシ事件の発生したマルセイユの市長は、禁止せよとの圧力を拒否し、『ランブラ一家を支援する会』が、市長に抗議して集会を開いたとも伝えられる。パリでは削除も禁止もされなかったが、『赤いセーター』を映写するいくつかの劇場に、発煙弾が打ち込まれ、上映が中止されたり中断されたりした。この妨害は極右団体の呼びかけに応じて実行されたらしい。『ル・モンド』や『ユマニテ』もこうした

反響を連日のように報じ、文芸週刊紙『ヌヴェル・リテール』も『赤いセーター』の特集を組んでいた。

最近のフランス映画には社会問題への関心が薄いとされ、映画産業そのもの不振の状態にあるときく。しかし、今日でもカルチェ・ラタンでの映画館の活発は、日本における一九五〇年代の盛況を連想させ、そこに展げられる各国映画の百花繚乱ほど、ヨーロッパが有する歴史の重みと状況の複雑さを認識させるものはない。チャップリンやバグマンの登場する映画が、飽きもせず繰返される一方、ナチズムを諷刺した『ブリキの太鼓』とヴェトナム戦争を主題とする『地獄の黙示録』がロングランを続けている。現代のスペインを扱った『一月の七日間』も貴重であり、そこにはフランコ政権の末期における、壮絶な抵抗運動が描かれていた。真摯で勇敢なスペインの学生が、下宿や刑場で次々に虐殺されて結末に至る。最後の画面には字幕だけが浮かんで、スペインのファシズム体制は一九七六年に崩壊し、苛酷な治安取締法もついに廃止された、と刻む章句を忘れることができない。『一月の七日間』が上映された時期には、スペイン・フランス・イタリアと連鎖する鉄道の大ストライキが数度あり、その反面ではマドリッドで右翼クーデターが成功したとの噂も流れていた。

パリ滞在の日数も残りわずかと感ずる頃であった。珍ら

しくジャンゼリゼ大通りに赴いたのも、帰国の準備のためである。大道の両脇は繁茂したマロニエが清々しく、路上のカフェは各国からの観光客で溢れている。私は小綺麗な映画館の前で足を留めた。ヨーロッパの辺境を背景に、苦渋に充ちた知識人の半身が画かれ、『エポリ』と大書きされたポスターが貼ってある。それはレーヴィの小説『キリストはエポリに留まりぬ』の脚色にはかならず、一九七九年のカンヌ映画祭に参加した作品であった。

その映画は冒頭から、名作に特有な清新さと緊迫感を湛えている。荒涼たる秃山と寒村を縫って、古めかしい列車が走る。数少ない乗客の中には、手錠をかけられた医者レーヴィがいた。ムッソリーニの政権に反対した彼は、逮捕されて、南イタリアの僻地へと送られる。汽車を自動車に乗り換えて、谷間の村落ガリアーノにたどり着く。曲りくねる坂道、危なげに傾く家、崩れかける土壁。そして商店も宿屋もないのである。キリストですら南部の入口にある都市エポリで引き返し、この辺境の地までは布教に來なかつた。古代から現代までいかなる文化や文明からも徹々たる恩恵しか受けていない。一九八〇年の秋に大きな地震が起こった。災害への対策と救済に不満があるらしく、「エポリに止まったのはイエスだけでなく、イタリア政府もまたそこに止まった」と新聞に批判が載せられた。

官憲による軟禁と監視を受けながら、一定の自由を許されたレーヴィは、仔細に寒村の暮しを観察する。村長はじめ上流人士の大半はファシスト党員であり、彼らが愛国青少年団を組織している。広場には演壇と拡声器が備えられ、喇叭と太鼓で村人が集められた。「ローマ帝国の栄光と繁栄を再興しよう」やがてムッソリーニは宣戦を布告し、エチオピアへの進攻が開始される。首都アジスアベバの陥落に狂喜乱舞するイタリアの男たち。しかし、こうした大言壮語とは裏腹に、ガリアーノに渦巻く悲惨と荒廃を、レーヴィは執拗に追跡する。私利私憤のためファシズムの威を借りる有力者、憲兵に小銭まで脅し取られる農民、また十五人の異なった男のため、十七回も妊娠した、美しい田舎女ジュリア。とはいえ、この厳しい自然のなかでレーヴィは、比類なく善良で剛健な人達を知る。山賊とともに権力と戦ってきた伝統、村人にささやかな楽しみをもたらす民謡や即興劇、そして早くから悲しみの感情と忍耐する意志を身につけた子どもたち。ロッシ監督による演出と映像もまた清冽である。それはイタリアの田園を歌った名画『木の靴の樹』に似通い、いっそう粗野で哀切に感じられる。

この映画を観てから一年のち、帰国して私は地方の大学にいた。パリにおける緊張し充実した日々のおとで、従来勤務に復しても、放心した状態からなかなか抜け出せない。

い。付属図書館の書庫に立ち入るのも久しぶりである。必要な文献を調べおえて、ふと私は『キリストはエポリに止りぬ』の翻訳を思い出した。それがヴェルコールの『海の沈黙』やルフューブルの『デカルト』と同じ叢書にあることだけは知っていた。ずっと以前に絶版とされたが、書架を探すとやはり並んでいる。蔵書印には二十年前に消えた古い校名が読みとれる。抵抗文学として名高いこの小説は購入の直後に幾度か読まれ、その後は借り出された記録がない。ヨーロッパの奥行と深淵を知るため、これほど適切な作品が身近かなところに埋れていたのである。みずからも旅したヨーロッパのいくつかの辺境を想い起こしつつ、私は冒頭の文章を読んでいった。

「ながい歳月はすぎた。それは戦争の幾年かであり、歴史とよばれる年月であった。あてどもなくあちこちと引き廻された私は、またいつか、と答えて農民とわかれたまま、いまだに約束をまもっていない。いつになつたらこの約束を果たせるか、それさえ私にはわからない。だが私はいま一室に閉じこもって隔離された一つの世界の中で、あの別の世界のことをほのぼのとした心で想い巡らしている。それは歴史にも国家にも無縁の世界、因襲と苦悩にしばらくられた永遠の忍従の国であった。何一つ慰めとてないこの悲惨な僻地で、農

民は動かぬ文明を不毛の土地の上に伝えながらやっとな
生きながらえていた。」（『レーヴィ著、清水三郎治
訳、キリストはエボリに止りぬ、岩波書店、一九五三
年。』の訳文による。）

（ながや ひでお 愛知教育大学）

哲学と現代 6

第6号

△戦後思想・文化をめぐって▽

- 戦後の永続すべき精神……………鈴木 正
現代日本思想文化序説……………島田 豊
認識の日常的形態に関する一考察……………岸本 晴雄
——「体験(談)」の問題をめぐって——……………19 7 1

△紀行▽

- プラタナスの木蔭で……………永治日出雄
——パリの大学・フランスの学芸——……………37

△思想史研究▽

- 三浦梅園の哲学……………浜田 晃
現象としての現象……………神尾 孝
——ヘーゲル『精神現象学』研究——……………69 57

△読書ノート▽

- ブール、イルリッツ『理性の要求』……………井上 文人
唐木順三『「科学者の社会的責任」……………岩淵 剛
についての覚え書』を読んで……………196

編集後記・名古屋哲学研究会会則

名古屋哲学研究会